

健康

質問 71歳の女性です。肺がんと診断され、免疫チェックポイント阻害剤の投与を受けることになりました。治療の説明で、自己免疫疾患の有無を

聞かれました。私には橋本病(慢性甲状腺炎)があります。治療の副作用で橋本病が悪化することがあると説明を受けました。どんなことに気を付ければいいですか。

免疫チェックポイント阻害剤



吉田 守美子 徳島大学病院 内分泌・代謝内科 副診療科長

回答 体内の免疫細胞はがん細胞を攻撃します。一方、がん細胞には免疫細胞の攻撃から逃れる仕組みが備わっています。

免疫チェックポイント阻害剤は、免疫細胞ががん細胞を攻撃できる状態に保つ薬剤です。がん治療に有効な反面、過度な免疫反応でさまざまな副作用を起こすことがあります。例えば▽間質性肺炎▽大腸炎▽重度の下痢▽甲状腺機能障害▽肝障害▽腎障害▽皮膚障害▽神経障害▽重症筋無力症▽下垂体機能障害▽1型糖尿病―です。自己免疫疾患を合併している場合は、自己免疫疾患が悪化する恐れがあります。そこで事前に問診と検査をします。

甲状腺異常の副作用も



甲状腺の自己免疫疾患には橋本病やバセド病があります。免疫チェックポイント阻害剤による甲状腺機能障害は比較的多く、もともと自己免疫性甲状腺疾患があれば、特に起こりやすくなります。甲状腺機能障害には機能低下症(ホルモン不足)と中毒症(ホルモン過剰)があります。免疫チェックポイント阻害剤による甲状腺機能障害は、一時的に甲状腺ホルモン値が上昇した後、徐々に低下する場合があります。甲状腺機能低下症が進行する場合があります。甲状腺機能障害が起きると、軽度では症状はあっても、重度になれば、いろいろな自覚症状が出ます。甲状腺ホルモン過剰の症状は動悸や発汗、手指の震え、体重減少など。甲状腺ホルモン不足の症状は倦怠感やむくみ、便秘、皮膚の乾燥など。ただし、これらの症状はがんによる全身症状と似ています。自身では判断が難しいかもしれません。

甲状腺機能障害の主な症状

ホルモン過剰

- ・動悸
・発汗
・手指の震え
・体重減少



ホルモン不足

- ・倦怠感
・むくみ
・便秘
・皮膚の乾燥



症状あればすぐに検査を

甲状腺機能障害は、血液で甲状腺ホルモンなどを調べて診断できます。甲状腺機能の異常を疑う症状があれば、すぐに検査しましょう。症状がなくても早期発見のためには定期的な検査を勧めます。甲状腺中毒症は一時的なことが多く、まずは対症療法(頻脈を抑える薬など)で経過を見ます。甲状腺機能低下症は、不足した甲状腺ホルモンを補充(内服治療)します。甲状腺機能異常の副作用が出る時、いったんがん治療を休止することがあります。症状がよくなれば治療を再開するのがほとんどです。甲状腺異常だけでなく、副作用を早期に見つけるため、可能性のある副作用についてよく知っておきましょう。治療のパンフレットに気を付ける症状があります。大切に保管して当てはまる症状があれば、すぐに主治医や内分泌専門医に相談してください。(第4土曜掲載)

がんに関する質問は 徳島がん対策センター (電話088(634)6442) (平日午前8時半から午後5時まで) へ。 Includes QR code.